

助詞「は」の習得 ——主題化の発達過程を探る——

伊藤 聖子*

1. はじめに

日本語学習者にとって、習得が難しいといわれるものの一つに助詞がある。「に」と「で」や、「は」と「が」のような助詞の使い分けや習得順序について、これまで多くの研究がなされた。先行研究において明らかとなっているのは、大きく以下の2点である。まず、助詞の選択には、ユニット形成(迫田2001)や、名詞句と助詞の間にみられる学習者独自のルール作成(野田2001)、インプットの頻度やかたまり表現を指標に選択する傾向があること(八木2000)が明らかとなった。また、助詞「は」は、助詞「が」に比べ正用率が高い(坂本2000)が、主題と主語を区別しておらず、主題化という機能の習得が進んでいるとは言い難いこと(八木1996)についても明らかとなっている。以上から、助詞「は」は習得が早いものの、その機能の習得は進んでいないことが明らかとなっている。では、助詞「は」はどのように習得されるのであろうか。

2. 先行研究

2.1 助詞「は」の習得

以下では、助詞「は」の習得について、先行研究を概観する。市川(1989)は「は」の誤用に関して学習者の作文データを対象に調査を行った。結果、助詞「は」の誤用の傾向として、他の助詞

との混同が多く、「が」格との混同や、「に」格「で」格の後に必要な「は」を落とすこと、「は」の過剰使用などが指摘された。学習者は、主格がどのように談話にかかわっていくか、主格をどのように談話の中で位置づけ取り立てていくかの判断ができていないという。

また、花田(2001)は、OPIデータを対象に調査をし、とりたての用法が学習者にとって最も難しいこと、「を」、「に」、「と」など「が」格以外の成分を「は」で表せるのは中級以降で、上級や超級になるにつれてその使用が増加し、豊富なバリエーションや、中立叙述と主題の使い分けが見られるとした。

吉田・白畑(2013)では、在日12年を超える中国人日本語学習者に対するインタビューを実施、分析の結果、使用された助詞のほとんどが習得できているにもかかわらず、助詞「は」のみが正答率80%と低く、習得が不十分であると指摘した。格助詞を使用すべき場所で「は」を使用する誤用が多くみられるとしている。

以上、先行研究を概観した結果、助詞「は」の習得において問題となるのは、談話の中での位置づけの難しさと、「が」格以外の格助詞の主題化の難しさであると考えられる。これまで助詞「は」は「が」との使い分けの難しさに注目されることが多かったが、格助詞と「は」の使い分けの難しさは、「が」に限らないのではないだろうか。格助詞で表される内容をどのように主題化するのかを明らかにする必要もあるのではないだろうか。そこで、本稿では、ガ格に限らない他の格助詞と

*お茶の水女子大学大学院修了生

の関係も踏まえた上で、助詞「は」の主題化がどのように発達していくのかについて検討していきたい。

2.2 「は」の主題化

まず、主題について、本稿では益岡・田窪(1992) 日本語記述文法研究会(2009)をもとに、以下のように定義する。主題とは、文が何について述べるかを示すものであり、「は」は主題を表すもっとも典型的な表現である。そして、主題化できるものは格成分、名詞を修飾する名詞、被修飾名詞、述語を含む節、副詞的成分・従属節などである。格成分を主題化する場合は、文法的な働きが異なるので、主題を提示する「は」と、述語に対する関係を表す格助詞の2種の助詞を伴うことが少なくない。そして、その場合、格助詞の後に「は」を付加する。ただし、「が」・「を」は「は」とともに現れることができない。

では、主題化はどのように習得されるのであろうか。峯(2015)は、格助詞「が」と係助詞「は」の習得について、花田(2001)で分析対象となっているOPIデータを対象に、処理可能性理論に基づき発達段階への位置づけを検討している。結果、対象を表すガは句処理の第3段階、否定+ハは文処理の第4段階、対比のハ、従属節内のガは複文・文脈処理が必要とされる第5段階と認定している。そして、主題のハについては、花田(2001)からは断定できないとし、第3段階より前の語彙・範疇処理の第2段階ではないかと推察している。そして、峯(2015)ではさらに、処理可能性理論に新しく加わった仮説の1つである主題仮説についても、日本語に当てはめた場合どのようなのかについて、Kawaguchi(2005)の研究にも言及しながら、検討している。主題仮説は、第二言語習得過程において、学習者は、最初、主語と主題の区別をしないが、時間や場所などを表す付加語が文頭に配置されることにより、主題と主語の区別が始まるとされている。日本語における主題仮説では、以下のようになると述べられている。

①学習者は主語と主題を区別せず「は」を使用

例) メリーは 朝ご飯を 作る

②時や場所などを表す状況語である付加詞を主題化できるようになる

例) 今朝は メリーが 朝ご飯を 作る

③主語以外の必須項目を主題化できるようになる

例) 朝ご飯は メリーが 作る

峯(2015)より

しかし、ここでは、主題化における日本語特有の難しさについては考慮されていない。

3. 問題の所在及び研究課題

先行研究では、格助詞に後に必要となる「は」を落としたり(市川1989)、「が」格以外の格成分の主題化が遅れたり(花田2001)することが指摘されているが、その背景には助詞「は」の複雑さがあるのではないだろうか。先にも述べたように、主題化する際、格助詞が落ちたり落ちなかったりする。そのような日本語特有の主題化の難しさを学習者はどのように習得していくのだろうか。本稿では、主題仮説の検証を通して、学習者の主題の発達過程を明らかにすべく、以下の研究課題を設定する。

RQ1:「格助詞+は」の使用はどのように変化していくのか

RQ2:助詞を選択する際の選択理由において、主題化の発達が進む理由と 進まない理由にはどのような違いがあるのか

4. 調査研究

4.1 研究課題 1

4.1.1 調査方法

調査対象としたのは、KYコーパス¹の初級、中級、上級、超級の中国語母語話者のデータである。本研究における手続きは、まず文字列で「格助詞+は」の正用・非用を含むすべての使用例を

検索後、非用や分析の対象外となる用例、慣用表現を除外後、レベル別にその使用状況をまとめた。

4.1.2 調査結果及び考察

結果を表1にまとめて示す。峯（2015）に倣い、処理可能性理論に基づき、一度でも産出されていれば習得できているものとして扱うが、一人目は特異な場合も考えられるため、二人目以降の産出が確認された部分を使用開始時期と見なし、網掛けで表した。

表1 「格助詞+は」の産出状況

	初級	中級	上級	超級
では	1	1	27	20
よりは	0	2	2	2
には	1	8	27	17
からは	0	2	2	2
までは	0	1	3	8
とは	0	1	14	2
へは	0	0	0	0

その結果、「では・よりは・には・からは」は中級で、「までは・とは」は上級でそれぞれ産出が確認できた。上の表1の結果に、花田（2001）の結果を合わせると以下の表2のようになる。

表2 主題化の産出状況

	初級	中級	上級	超級
では				→
よりは				→
には				→
からは				→
までは				→
とは				→
へは				
は (が)				→
は (で)				→
は (を)				→
は (に)				→
は (と)				→

主題化の産出が見られるのは、まず初級で格助詞を落とす「が」「で」、次いで中級で格助詞を落とす「を」「に」、「では」「よりは」「には」「からは」、そして上級で「までは」「とは」、超級で格助詞を

落とす「と」という結果となった。「格助詞+は」の形式よりも、格助詞を落とす主題化のほうが早い段階から見られる結果となった。しかし、日本語の格助詞の場合、一つの格助詞が複数の意味用法を持つことから一つ一つの格助詞の使用状況についても調査し、主題仮説の検証を行うこととする。

表3 「格助詞+は」の意味用法別使用状況

	からは	よりは	とは	までは	には	では
初級					他には	場所+では
中級	これからは	名詞+よりは	とはいえない	ここまでは	場所+には 範囲・時+には	場所+では
上級	これからは 名詞+からは (起点)	名詞+よりは (相手) それよりは	とはいえない とは思わない とは違う	場所+までは	主体+には 基準+には 時+には 領域+には 場所+には 着点+には 相手+には	場所+では 領域+では 起因・根拠+では
超級	名詞+からは (起点)	名詞+よりは 動詞+よりは	とは思 う 名詞+とは	ここまでは 名詞+までは 動詞+までは	場所+には 目標+には 時+には 相手+には 基準+には	場所+では 領域+では 起因・根拠+では

結果、「までは」「には」「では」のような複数の意味用法を持つ格助詞の主題化の場合、固定表現→場所・時→主体・相手・領域といった順に使用が広がっていく様子が窺えた。日本語においても主題仮説を支持する結果となった。

以上の結果を主題仮説に基づき、考察すると、まず、学習者が主語と主題を区別せず「は」を使

用する段階と考えられるのは、初級で見られた格助詞を落とす「が」の主題化である。続いて、時や場所などを表す状況語である付加詞を主題化できるようになる段階と考えられるのは、初級で見られた格助詞を落とす「で」「に」や、中級で見られた「には」「では」の使用である。また、主語以外の必須項目を主題化できるようになると考えられるのは、中級で見られた格助詞を落とす「を」、超級の「と」、上級の「には」であると考えられる。

上記の結果は、初級から、中級、上級へと段階が上がっていくことで、主題仮説で示された発達段階が進むように見える。しかし、初級において、主語と主題の混同、付加詞の主題化の両段階が見られるように、より詳細な調査をする必要があるといえよう。

4.2 研究課題 2

4.2.1 調査方法

国内の日本語学校・専門学校に通う中国語を母語とする学習者を対象に空欄補充調査、選択理由の自由記述調査を行った。対象者は46名で、調査にあたり、フェイスシートでN2以上を学習中であるか、助詞の基礎調査で基本的な助詞が使用できるかどうかについて確認した上で、調査を行った。

空欄補充調査に使用した調査文は、調査対象者の多くが使用している『みんなの日本語』『学ぼう！日本語』に出てくる格助詞の学習項目を日本語教師2名で確認し、日本語記述文法研究科(2009)の格助詞の分類と照らし合わせた上で、野田(1996)、庵他(2001)の主題の定義に基づき、先行する助詞を主題化するかどうかの問題となる文を作成し、日本語教師3名に対して実施後、最終調整を行い、作成したものである。

調査対象とした格助詞は表4に示す13の格助詞の意味用法である。空欄補充調査で使用した調査文を一例として示す。

表4 調査対象となる格助詞

意味用法	例文
動作主	ガ 雨が降る
対象	ガ ~ができる ヲ ジュースを飲みます
相手	ニ 彼に会います ト 友だちと京都へ行きます
起点	カラ 毎日6時から7時まで勉強します
目標	マデ 毎日6時から7時まで勉強します ニ 電車に乗る ヘ 新幹線で大阪へ行きます
道具	デ タクシーでうちへ帰ります
場所	ニ ~の上に~があります デ 駅で新聞を買います ヲ 公園を散歩します

①主題を問う問題

明日の午後から雨が降りだすでしょう。雨(は・が)今週いっぱい降り続く予想です。

②格助詞を問う問題

「今日は台風が近づくとって言ってたけど、どうかな？」

(窓の外を見て)「あー、雨(は・が)降ってきたね。」

4.2.2 調査結果及び考察

結果を以下の表5に示す。選択できた場合を1、できなかった場合を0として、その平均を示した。先行研究とは異なり、助詞「は」の過剰使用は見

表5 空欄補充調査 選択結果

格	意味役割	主題	格助詞
ガ	動作主	0.5	0.9
ガ	対象	0.1	0.9
ヲ	対象	0.4	1.0
ニ	相手	0.6	0.9
ト	相手	0.5	1.0
カラ	起点	0.5	1.0
マデ	目標	0.7	0.9
ニ	目標	0.7	1.0
ヘ	目標	0.5	0.9
デ	道具	0.8	1.0
ニ	場所	0.3	0.8
デ	場所	0.2	1.0
ヲ	場所	0.9	1.0

られなかった。t検定の結果においても、主題化と格助詞の選択について有意な差があることがわかった ($t(12)=3.043, p < .01$)。

また、どのような選択理由が主題の選択に結びつき、どのような選択理由が主題化を妨げるのかについて、選択理由をみていくこととする。まず、主題化が多くみられた9名の選択理由を以下に示す。理由の後の数字はその人数を示す。

表6 選択理由【主題化が多い場合】

格助詞 意味	選択理由	
ガ 動作主	後ろの内容を強調 2 強調 1	ない 1
ガ 対象		ない・なん となく 3
ヲ 対象	強調 1 主語 1 提問 1	ない 4
二 相手	強調 2 ご家族の場合では対象 1 確かめている 1	ない・なん となく 3
ト 相手	強調 2	感覚 1 ない 2
カラ 起点	強調 2 主語 1 説明している 1	ない 4
マデ 目標	強調 1 主語 1 提示主語 1 説明 2	ない 4
二 目標	強調 2 主語 1 説明している 1	ない 5
へ 目標	強調 5	目的地にいく 1 聞いている 1 ない 2
デ 道具	強調 1 主語 1 固定用法 1 説明 1	ない 5
二 場所	強調 1 後ろの内容を強調 1 前に出た 1	ない 2
デ 場所	強調 1	ない 2
ヲ 場所	主語 3 強調主語 1 前に出た 1 事実を伝える 1	ない 3

共通して見られたのは、強調・主語・説明というキーワードである。つまり、これまでの研究で指摘されている主語と主題の混同があっても、主

題化が可能であるが、取り立て助詞という特徴や、主題－解説という構造を重視する「強調・説明・伝える」といった選択理由が主題化には必要であるといえよう。

一方、主題化があまり見られず格助詞の選択が多かった10名について、以下で見ていくこととする。なお、この10名については習熟度が不十分であることが、主題化が少なくなる理由とならないよう、N1, N2合格者に限定した。

表7 選択理由【格助詞の選択が多い場合】

格助詞 意味	選択理由	
ガ 動作主	自然の状況 1	ない 3 感覚 2
ガ 対象	できるの前 3	ない 4 難しい 1 わからない 1
ヲ 対象	を飲む 1 目的格 1	ない 4 わからない 1
二 相手	人物に会う 1	ない 3
ト 相手	とは 助け合う 1 この時は使わない 1	ない 6
カラ 起点	時間の起点 1 迷った 1	ない 2 わからない 1
マデ 目標	場所 1	ない 2 感覚 1 わからない 1
二 目標	彼には何でもできる 1 「に」のる 1	ない 3 わからない 1
へ 目標	地区の後 1 へははみたことがない 1 行動の方向 1	ない 3
デ 道具	交通手段 1 交通工具で 1	ない 4
二 場所	机の上に 1	ない 3 勘 1 わからない 1
デ 場所	場所 3 このようではなにも できない 1	ない 4 わからない 1
ヲ 場所	どこを散歩した 1	

主題化につながらない選択理由としては、動詞とのユニット形成や格助詞の意味を重視することがあげられる。

以上の結果から、学習者は格助詞を選択する傾向が強い場合、助詞の選択の際に格助詞の影響を強く受けることが分かった。談話の中でとりたてられるべき内容かどうかを判断するよりも、動詞や名詞との結びつきが強く影響している結果であった。また、本研究では主題化するものは文頭に来ようそろえたが、文頭に名詞句があるかどうかは主題化に影響しない可能性が考えられる。

5. まとめ

RQ1の「格助詞+は」の使用の変化について明らかとなったのは以下の3点である。まず、「格助詞+は」の産出自体は中級から確認できるが、固定表現に限られ、バリエーションが豊富になるのは上級以降であること、そして、「格助詞+は」は格助詞を落とす「は」のみの主題化よりも遅れて産出されることが確認された。さらに、主題化される格助詞を意味用法別にみた場合、固定表現→場所・時→主体・相手・領域といった順に使用が広がる様子が見られ、主題仮説を支持する結果となった。

また、RQ2では主題化ができるようになるためには、強調や説明といったキーワードが必要であること、主語や主題の混同があっても主題化することが可能であることが分かった。一方、動詞や名詞とのユニット形成や格助詞の意味用法を重視すると主題化しない傾向にあることもわかった。

6. 日本語教育への提言

本稿では、以上の結果から、助詞「は」は初級から導入される助詞ではあるものの、中級以降に主題を表す助詞として体系的に指導しなおす必要があると考える。

まず、助詞「は」の主な働きは主題を表すマーカーであり、「主題化とは何か」を学生に提示する必要がある。そして、格助詞によって主題化

のルールが異なること、主題化するかどうかに動詞とのつながりが関係ないことを学習者に示す必要がある。文法規則を学ぶことで、意味・機能を明確に学べるという考え方もある。学習者の持つ文法規則を新たな文法規則に修正する必要がある。

7. 今後の課題

今後の課題として、以下の2点があげられる。

まず、縦断調査の必要性である。今回の調査では、詳細に発達段階を特定できない部分があった。各格助詞の主題化について、縦断的な調査を行う必要があると考える。また、産出が見られなかった「へ+は」についても話題を複数示し、検証する必要がある。

次に中国語以外の母語話者に対する調査の必要性である。本研究では母語に主題マーカーを持たない中国語母語話者に限定して調査を行ったが、母語の影響が出ているのかどうかを検証する必要がある。

〈注〉

1) タグ付きKYコーパスを使用した。詳しくは<http://ihlee.sakura.ne.jp/kyc/>を参照されたい。

〈参考文献〉

- 庵功雄・中西久美子・高梨信乃・山田敏弘 (2001) 『中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子 (1989) 「取り立て助詞「ハ」の誤用—談話レベルの誤用を中心に—」『日本語教育』67, 159-172.
- 坂本正 (2000) 「日本語の助詞「ハ」と「が」の習得—韓国語、中国語、英語の母語話者を比較して」『日本文化學報』8, 69-81.
- 迫田久美子 (2001) 「学習者の文法処理方法」野田尚・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』第2章 大修館書店
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1 「は」と「が」』

くろしお出版

- 野田尚史 (2001) 「学習者独自の文法の背景」野田尚・
迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の
文法習得』第3章 大修館書店
- 花田敦子 (2001) 「談話資料に見る「は」「が」の習得」
『久留米大学外国語教育研究所紀要』 8, 89-108.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』くろ
しお出版
- 峯布由紀 (2015) 『第二言語としての日本語の発達過
程 言語と思考のProcessability』ココ出版
- 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本
語の助詞の正用順序：助詞別, 助詞の機能別,機能
グループ別に」『世界の日本語教育, 日本語教育論
集』 6, 65-82.
- 八木公子 (2000) 「「は」と「が」の習得：初級学習者
の作文とフォローアップインタビューの分析から」
『世界の日本語教育, 日本語教育論集』 10, 91-107.
- 吉田智佳・白畑知彦 (2013) 「日本語学習者の助詞の
習得調査：滞在が10年を超える中国語を母語とする
日本語学習者の事例研究」『外国語教育：理論と実
践』 39, 95-107
- Kawaguchi, S (2005) Processability Theory and Japanese
as a Second Language. 『第2言語としての日本語の
習得研究』 8, 243-298